



南スラウェシ調査行

前 田 成 文

南スラウェシの西海岸では、月名に“r”のつく月は雨の降る月である、というのが Mattulada 教授の説である。9月から4月までにあたる。ウジュンパンダンに着いたのは1980年10月8日であったが、空港から市内へ行く道、とくに Maros 県はカラカラに乾いていて、雨がまだ来ていないことを示していた。それでも11日には初雨らしきものが少し降った。この日に高谷好一、古川久雄、田中耕司の3氏がジャカルタから到着。その翌日から、あるいは Mattulada 教授と一緒に、あるいは4人だけで、ウジュンパンダンを中心にフィールド・トリップに出かけることになった。

私にとって南スラウェシの調査は2度めである。ちょうど5年前の1975年の11月から翌年3月まで Sidrap 県で調査をしている。今回は自然科学者と一緒なので、彼らの予備踏査に当分同行する形で再び南スラウェシ全体をみてみたい。

自然科学者との予備踏査は11月初めまでである。このあとは、自然科学グループは南スラウェシを数カ所の ecological units に分けて、それぞれの地域の調査を比較的インテンシブに行い、私はその中で今回の調査の結節点となるような村を選んでケース・スタディを行う予定である。このような広域のサーベイと村落調査の組み合わせは、“area-extensive, village-intensive” とでも名付けられようか。私の村落調査は一つの村に実質的に滞在できるのは3カ月ぐらいにしかないの、人類学でのコミュニティ・スタディとしては大変短く、むしろ1年ないし2年の調査のための予備調査と考えられるかもしれない。しかし“village-intensive”なデータばかりでなく、“area-extensive”な情報が自然科学者の目を通して入るのはありがたい。

1975-76年に調査した Sidrap 県の Amparita 村には10月19日の夕方、Sadang 河かんがいプロジェクト視察のあと立ち寄った。Sidrap 県の県都 Pang-

kajene から Amparita までの8kmは、昔のジャリ道から舗装道路になっていた。郡長は私の滞在していた時の人から3人めで、Mattulada 教授の講義も受けたという若い大学卒の Sarjana で、在任9カ月めという。県都の Pangkajene で県長およびそのスタッフから聞いた話では、99.57%の水田で新品種が植えられ、毎年1月ないし2月に Tudang Sipulung という集まりをして、かんがい田、天水田の表作、裏作の作期を、例えば苗代作りは3月の第1週から第3週までというように、各地域ごとに決定して、その決定に従って実行するという。この会合には、県長以下の政府関係者、農民代表 (tokoh 2 tani)、ロンタラ読み (pallontara)、宗教知識人 (alim ulama)、有力者 (pemuka masyarakat) が出席する。Sidrap では、いまやかんがい田では米の2年5期作から米4回と水田裏作 (palawija) 2回への組み合わせに移行しつつあり、土地を乾かすため1期休閑する試みもしているという。一方、“各種の調査隊”、プロジェクトもこの県に集中する傾向がみられ、その中の一つのドイツのチームは、飲料水その他の生活用水不足の問題を解決するために、200 m 地下の水源の調査をしているという。

実はジャカルタに到着した時は、税関吏が悪くなり、物価が高くなっているのに驚いたものである。ウジュンパンダンでは比較的時間差が5年と長いので、余計に物価の上昇が痛切であった。農村部では家・屋敷地をみている限り、地域的な貧富差と、同じ地域での立派な家と貧しい家とがみられるのは前回の時と同じだが、今回は全体として表見の方が一層良くなっている。上述の Sidrap 県にみられるような、一種の繁栄ないし近代化が進んでいることも確かなようである。

いよいよ雨期に入ったのか、この3日間、毎日雨が降る。(1980. 10. 22. Tinggimoncong 郡で) (京都大学東南アジア研究センター教授)